

## 一億総中流：歌川広重の名所江戸百景と日本の中産階級の発展

ワロフカ・アレックス

有名な19世紀の浮世絵師歌川広重の「名所江戸百景」の最初の絵「日本橋雪晴」は江戸の典型的な世界が描かれている。(Fig 1) 他の浮世絵師もよく同じような絵を描いたが、広重の作品では社会の階級が見えるという点で類がない。浮世絵でよく描かれている象徴的な富士山とその下に幕府の力を示す江戸城もあるが、この絵では活気あふれる下町の日本橋の町人の生活に目が引かれる。描かれている賑やかな市場、橋、川岸などは生まれ始めた中産階級の力が見て取られる。

戦後の日本の平等主義社会を述べる時、「一億総中流」という言葉がよく使われている。戦争が終わってからまだ30年経っていない1973年の日本政府の調査によると、日本の人口の9割は中産階級だった。(Duss 1998) この中流階級は戦後の時代で生まれたと考える人がかなりいるが、浮世絵から見られる江戸時代の文化をよく研究すると、20世紀の平等主義の社会はやはり徳川幕府の行政下で始まったと言える。

徳川家康が家臣と1590年に江戸に入城した。その時、先に首都になっていた江戸は管理されてない城しかない釣りの村だった。世襲財産を手放す代わりに、家康は関東の八国を手に入れた。家康が持てる領地を著しく増やしたので、それは理論的には昇進だが、実は秀吉が望んでいたことは家康を江戸に孤立させて彼の力が弱くなることだった。

しかし、実はその反対が起こった。何もない江戸で、家康はゼロから始めて、簡単に新しい権力の基盤を作ることができた。すぐに強力な軍隊を作って、地元の武士の忠誠心を培った。そして、1600年の関ヶ原の戦いの勝利の後、豊臣家を破って自分の力を強化した上で天皇から「将軍」という称号を与えられた。他の大名が家康と同じような昇進ができないように、新しく作られた徳川幕府はいろいろな藩主を支配する規則を設けた。この規則は確かに別の大名の力を弱くしたが、同時に町人の力を強くするという予期せぬ結果をもたらした。

将軍になってから初めての政策の一つは日本の社会構造に儒教の哲学を取り入れることだった。それゆえに、江戸社会を官吏・百姓・職人・商人、つまり士農工商という四つの層にした。儒教の哲学によると、社会の一番上にあるのは賢く階級を支配する武士、その次に大事な食糧を栽培する農民、そして他の人が生産した原料で品物を作る職人である。一番下にあるのが上の階層の仕事で自ら儲かっている商人である。デビッド・ハウオル氏によると、儒教の教えによる士農工商の社会構造を作った最も重要な理由は確かに国民を支配することだが、根本的な考え方は社会の下にある人達にも情け深い施しを保証することだった。(21) 武士は、国の保護者として、もちろん尊敬される権利があったが、下層階級の人達に奉仕する義務もある、と儒教に教えられた。(Hall 175) 多くの場合に、この義務はダム、運河、上水、公園などの公共事業を国民のために施行することで満たされた。この事業で使われた労働力はもちろん下層階級の人達だが、大名達はこの任務でお金などをたくさん消費した。このような責任分担と普遍的な利益は士農工商の社会構造を弱くする影響もあった。すなわち、徳川家が社会秩序

を守るために取り入れた儒教の哲学は実際に平民の生活水準を上げると同時に大名の富を使い切ることでその階級の序列を変えてしまった。

その上、実際に儒教の士農工商の身分制度では、下層にある町人はその制度に縛られていなかった。制度的に農民、職人、商人の三つの階層の区分はほとんどなかった。(Howell 24) ハウオル氏によると、「階層による職務は違うが、全階層は社会秩序の安定性を守るために等しく重要だった。身分関係は垂直的な階層の違いより水平的なこの社会的機能の違いに導かれた。」(31)

儒教を基礎とした教育政策も町人の向上原因の一つであった。名所江戸百景の47点目の絵「昌平橋聖堂神田川」にある湯島聖堂のような儒教の学校は大名の息子達を教育するために江戸で建てられた。(Fig 2) 以前に上流階層を教えた仏教の聖職者達は寺子屋で町人の子供達を教え始めた。その結果は、町人は武士とほとんど同じ識字力と計算能力の水準に達した。19世紀半ばまでに、江戸の就学率は7割を超えた。(Kato 3) この教育は事業を経営するためや町人の文化を発展するために役に立っただけではなく、価値を強調する儒教の社会では全般的に町人の重要性を増大させた。

幕府が施行した参勤交代も町人の力を強化した。この政策ではすべての大名を半年江戸に住むようにさせた。そして、その大名達の家族は人質として一年中江戸に住まなければならなかった。反乱の可能性を減らすように、徳川幕府は大名に精巧な住居を建てさせた。江戸は城と最も忠誠な大名の屋敷が中心にあるらせん状で設計された。名所江戸百景の

5 4 点目の絵「外桜田弁慶堀糶町」で江戸城に一番近いところに将軍が最も信頼した大老の井伊直弼の上屋敷が見える。(Fig 3) 忠義な大名の屋敷は城近くに、反逆する可能性が高い大名の屋敷は距離を置かれた。江戸の地の7割の「山の手」という地区が武士に割り当てられていて、残りの3割は「下町」という町人の地区になった。(Smith 9)

参勤交代制度は階級構造に大きな影響を与えた。町人によるサービス業への要求が急に増えた。大名と家臣がひとまとめに江戸に来るとき、幕府は屋敷の建設に当たり膨大な原材料や熟練工を使っただけではなく、高級品嗜好の武士の間では高価な製品が流通した。すなわち、幕府の政策で武士が消費者層になってしまった。

19世紀までに、武士はひどい財政難に陥ってしまった。参勤交代の政策で百年以上幕府に二つの屋敷を持たせられたり江戸に往来させられたせいで、大名は本質的に貧乏人になってしまった。何百年前に設定した幕府から米でもらった給料はインフレと貨幣経済への推移のせいでほとんど無価値になってしまった。大名は裕福な商人達から高利でお金を借りることになってしまった。地位の低い家臣はよく手工芸品を作ったり職人か商人の店に勤めることになった。

歌川広重はこの事象を例証している。彼は地位の低い武士に生まれて、20年間江戸城を守る消防士を勤めた。多くの同時代の武士と同じように、収入を補うために歌川豊広という浮世絵師の見習いをした。貴族の出にもかかわらず、必然的に広重が職人、

つまり町人、になった。他の浮世絵師と同じように、もちろん芸術だが、主として商人の店のための広告を描いた。東京広告美術館にある広重の「東海道五十三次」の「関本陣早立」は製品紹介の例の一つである。「玄関に下がっている札は、本来は大名の名が記されているものですが、ここでは、『仙女香』『美艶香』とおしろいの商品名が書かれています。」(sec. 5) 広重の才能が上達して有名になった後、名所江戸百景などの多くの絵は出版社から芸術的価値だけのために注文を受けた。広重は武士出身の人間にとって想像もできないような、職人に弟子入りをして商人のために働いていた。

徳川幕府に作られた五街道という道路網も社会を平等にするものとして役割を果たした。(Vaporis 19) 全部の道路は江戸、日本橋を起点と定められた。約6キロごとに置かれた、安全でよく整備、管理された検問所は通行する人や物の動きを統制するものとして作用した。検問所は休める場所としても役割を果たした。そこでは、起業家は宿屋や料理店、お土産屋を開業した。巡業旅芸人が演芸を見せた。新しく作られた道路網は急に全階層の国民的関心事となった。武士も平民も仕事や娯楽のために街道を使い、旅行案内書や広重の東海道五十三次のような旅行を題材とする浮世絵がベストセラーになった。その上、検問所は違う階層が自由に触れ合うことができる所だった。「福翁自傳」によると、福沢諭吉が1854年に、金持ちの息子、芸者、娼婦、農民、聖職者な

どと一緒に街道を共にした。(Vaporis 260) この道路網の影響で、京都や大阪からの大商人の家族は江戸で支店を開店できた。

日本橋は道路網の中心だが、町人の富を増やしたのは徳川幕府の経済政策だった。町人の重要性を分かって、徳川家康は日本橋を商売の中心地として彼らに江戸への移住を助長した。奨励として、幕府は江戸へ移住した商人と職人に公式の認可をあげ、優先的に武士が彼らの顧客になることを保障した。住居においても特別待遇を与えられた。例えば、摂津国佃村からの漁夫達は江戸湾に人工島を作る権利を幕府からもらった。(Tomiooka 2) または、広重の名所江戸百景の7点目の絵「大てんま町木綿店」では、町内で綿を扱う人と店が見える。(Fig 4) そして、商業は上流階層にとって不相応な仕事だから、町人が専売を持つようになった。三井高利は江戸で開業し成功した商人のよい例である。三井の元上流階層の父親は関ヶ原の戦いの後で商人の必要さに気づき、生まれの三重県で造り酒屋を始めた。彼の死後、高取の母親は質屋も開業した。長男を江戸に移らせ支店を開業させ、高利は彼に弟子入りした。見習いの給料で、高利はすぐ闇金融の仕事をした。それで十分な元金を集めて、現金掛け値なしで全階層に売る呉服店を開店した。すぐ後幕府から両替業の免許をもらって、江戸、大阪、京都金銀為替御用達の両替商を開業した。三井の遺言で書いた警告、「完済しないから、大名にお金を貸すな」は、武士の財政的な苦境を象徴している。(Dersin 111) 名所江戸百景の8点目の絵「する賀てふ」で見える広重の時代の越後屋は、今は三越と三井本館となって残っている。

(Fig 5)

お金持ちの町人から、豊富な文化が生まれてきた。18世紀の終わりまで、江戸っ子という下町の住人は類のない性格を持つようになった。1788年に山東京伝はこのように江戸っ子の五つの条件を描写した：

第一はお膝元の生まれ。水道の水を産湯に浴びて、将軍と同じところ、つまりお膝元に生まれているという意識。第二は金離れが非常にいいこと。宵越しの金は持たないという気質。第三は乳母日傘でたいへん贅沢な生活をして育ったこと。第四は江戸っ子は日本橋を中心にした江戸の町の中央に生まれた生粋の生え抜きだということ。第五は「いき」と「張」を本領とすること。(Nishiyama 42)

商業を管理することで力をたくさん持つことも武士にうらやましがられていることも分かって、町人は喜んで武士を仕えた。

広重の絵から江戸っ子文化の頂点の江戸生活が一瞥できる。広重がコレラで死んだ1858年には、徳川幕府はもう衰え始めていた。封建時代の終わりは広重の絵で間接的に記録されている。名所江戸百景の13点目の絵「下谷広小路」ではいろいろな幕府を脅かしていたものをが描写されている。(Fig 6) 右側にある顕著な松坂屋はますます力を持つようになってきている商人の脅威を象徴する。傘を持って歩いている町人の女達は増えている平民の豊かさを示す。そして、前景にある洋服のズボンをはいている武士は幕府の終わりを予示する。260年間安泰を守った徳川幕府の政策は、町人が抑圧された力を爆発させて武士を害する予想外の結果となった。現代の日本人のほぼ全員が中産階級であるという意識は江戸時代に豊かな経済力を持ち、華々しい文化を生み出

した町人にさかのぼって調べることができる。1868年の明治維新の後、武士が階級としてなくなった。急速に近代化している明治時代に、町人の技能はもっと貴重になった。教育を受けた進取の増加した町人の力は明治時代を超えて、戦後日本の奇跡的な経済の発展と中産階級が生まれる原因となった。

Figure 1



Figure 2



Figure 3



Figure 4



Figure 5



Figure 6



## Works Cited

- Dersin, Denise, ed. *What Life Was Like Among Samurai & Shoguns: Japan AD1000-1700*.  
Alexandria: Time Life Books, 1999. Print.
- Duss, Peter. *Modern Japan*. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1998. Print.
- Hall, John W. "The Bakuhan System." *Warrior Rule in Japan*. Ed. Marius B. Jansen. New York:  
Cambridge P, 1995. 147-201. Print.
- Howell, David L. *Geographies of Identity In Nineteenth-Century Japan*. Berkeley: University of  
California P, 2005. Print.
- Kato, Hideki. "Breaking the State Monopoly on Public Affairs." *Governance for a New Century:  
Japanese Challenges, American Experience*. Ed. Thomas E. Mann and Sasaki Takeshi. Tokyo:  
Japan Center for International Exchange, 2002. *Japan Center for International Exchange*.  
Web. 29 June 2008. <[http://www.jcie.or.jp/thinknet/pdfs/new\\_kato.pdf](http://www.jcie.or.jp/thinknet/pdfs/new_kato.pdf)>
- Nishiyama, Matsunosuke. Trans. Gerald Groemer. *Edo Culture: Daily Life and Diversions in Urban  
Japan, 1600-1868*. Honolulu: U of Hawaii P., 1997. Print.
- Smith, Henry D., II. *Hiroshige: One Hundred Famous Views of Edo*. New York: George Braziller, Inc.,  
1986. Print.
- Tokyo Musuem of Advertising and Marketing. "Edo Period – Treasure House of Advertisements."  
*Advertising Museum Tokyo*. Yoshida Hideo Memorial Foundation, n.d. Web. 28 May 2008.  
<<http://www.admt.jp/en/exhibition/permanent/howto/idea.html>>

Tomioka, Issei. "Nihonbashi uogashi no raireki." *Kikkoman kokusai shokubunka kenky! sentaa*. n.d.

Web. 30 June 2008.

Vaporis, Constantine N. *Breaking Barriers: Travel and the State in Early Modern Japan*. Cambridge:

Harvard University Asia Center, 1994. Print.